

原田伴彦著

日本封建制下の都市と社会

松山 宏

原田伴彦氏の都市研究に示される活躍は、今更いまでもないが、中世から近世へと、その足跡はまことに広く且つ豊かである。この『日本封建制下の都市と社会』は、先に発表された『日本封建都市研究』の姉妹篇として、前書につづいて発表された論文十をまとめたものである。氏にいつも御教示をうけるものとして、以下不十分ではあるが紹介をして行きたい。

1

我國でいう封建都市というのは、ヨーロッパでいう中世都市に相当するが、その都市の形成期にあたるものを中世都市、成熟期にあたるものを近世都市とするのは周知の事実である。これを主として中世末と近世初期についてその差異を論じながら、都市の発展過程を追求しようとするのが、「中世都市から近世都市への展開」の意図なのである。以下その内容を紹介すると、先ず都市数であるが、中世においては、氏の『中世における都市の研究』に集められたものに更に新しい事例を追加され、その数は八、九百あつたとし、一

方近世においては約二千あり、これに在郷町を加えると四千あるだろうとする。次に聚落の配置は、中世では疎散であり複式構造を持ち、市中心で人口も少いに対し、近世では街区の集約、団塊的集落的性格を持ち、店舗中心で、人口も四・五倍を擁している。また家屋は、中世では平屋で狭いが、近世では二階屋が多く規模も大きく、中期からは瓦葺がみえはじめている。都市計画は、中世の雑然たるものにくらべ、近世では整然となり用水施設も充実している。一方、町を構成する各階層は、中世では武士・農民・町人が混在しているが、近世でははつきり區別され、町割は見事に封建的編成をとっている。ただ開郭においては両時代を通じて欠如しており、都市の封建的性格についても同じである。

以上各面から詳細に両者の差異を論じているのであるが、二・三私見を述べておきたい。第一に都市とは何か、という点である。旧著では五・六百とされたが、ここでは八・九百となつている。一見して分かるようにその差は可成り大きい。新史料があらわれたといえ、それまでだが、しかしこれは単にそれのみにつきないものを持つていると思う。旧著において、氏は、都市とは一定の人口・一定の商業・一定の社会的分業の行われる聚落をいうとされたが、確かにこの一定ということは重要であり、殊に中世について単に町なる呼称を持つものをすべて都市とすることは、漠然としているのではないかと思う。次に村落との関係であるが、都市の村落からの分離独立度は、中世と近世でどう違つているのか、殊に成熟期においてどうあつたのかという点を、地域差・類型差、更には都市起原の新旧を考慮して、一層明瞭にして欲しかつたと思う。

第二の「中世社寺領支配の性格とその変遷」であるが、これは門前都市の研究が少いなかでは、まことに貴重な労作である。内容については、この論文の末尾に整理されているのであるが、一応要点だけを次に述べておきたい。門前都市の成立は、社寺が経済的基盤を土地から商業市場へ移してきた南北朝時代にある。ところが十五

世紀になると、社寺のなかで中下級の神官僧侶の抬頭が活潑となり、これに乗じて戦国大名たちが領国支配を強めてゆく。これら大名による門前都市の支配は、地域によつて多少違つた形態をとつたが、等しく全国的に行われ、殊に織豊政権の出現と共に、十六世紀末には、封建権力による門前都市への支配はより徹底的になされた。以上が荒筋であるが、全く見事に説きつくされ、私自身非常な感銘を以て読んだ。

第三に「中世商業の展開過程」であるが、これは中世の各時期について商業発展を追求している。以下順を追つて述べると、先ず鎌倉時代では荘園領主が商品経済を支配しており、商業発達地域は、京都・鎌倉と精々東海道地域である。南北朝時代になると、銭納がみえ、荘園内部に市が立ち、また座が社寺からはなれて室町幕府・守護大名・在地土豪と結ぶようになる。有力名主が農村市場を支配し、かれらのなから商人もあらわれる。室町時代になると、定期市がみえ、農工の分離、商人・手工業者の分離、小売商の出現となつて、行商の規模と行動範囲は拡大してくる。こうして十五世紀の半ばを迎えると、数千の戸数を持つ都市があらわれ、海外貿易も活

潑となる。土一揆の蜂起は、社寺・幕府・守護大名の支配する商品経済に決定的打撃を与え、領国経済時代となる。戦国時代の商品経済は、小農民・小商工業者を母胎として、城下町を整備し、織豊政権はこれを一層徹底的にするとともに、全国的な商業発展を行う一方、都市と商業に対する完全支配を行つた。

以上紹介が稍冗慢となつたが、右の二つの論文は、中世における商業の発展と都市の関係を明らかにしており、そこに重要なものを含んでいると思われるので、一括して論じてみたい。先ず氏の商業発展の経過を私なりに図式化すると次のようになる。荘園領主的商品経済（平安末―南北朝時代）・室町幕府・守護大名・披官土豪の商品経済（室町初期―中期）・戦国大名・織豊政権の商品経済（戦国時代―天正時代）となり、尚室町中期から戦国時代の間に土豪・地侍・中下級神官・僧侶の商品経済が、若干期ではあるがみえる。そしてこれら土豪・地侍の商品経済を背景にしてつくられたのが惣

町であることはいうまでもない。ところで右の図式によつて考えるとき、私は戦国時代の商業については若干異論を感じる。小論では充分意をつくせぬが、簡単にいうと次の点である。氏は戦国時代に兵農分離が強行され、薬市薬座が発令され、土豪・地侍の商業に対して持つ支配的紐帯を断つたとされたが、しかしこれらはこの時期にはまだ極く未熟な形でしかなされていない。大和の筒井などは、土豪・地侍の商品経済を足場に戦国大名となつたものである。兵農分離となり、薬市もそれが全面的に施行されるのは天正であり、更に土豪・地侍の商業からの断絶も織豊政権によつてである。筒井の没落はそれを如実に示している。つまり戦国大名の商業への関係

は、織豊政権のそれと同じ系列に属するものよりは、むしろ先に少し述べた土豪・地侍の商品経済の枠の中でみるべきではないか。そして氏の言われる小農民・小手工業者・小商人を母胎として展開する商業こそは、織豊政権を生み出したものであり、それなればこそ、地侍層のつくついている惣町の解体が強行され、都市が続々あらわれ、同時に全国統一の権力がつくられてくるのではないだろうか。

3

安土・桃山文化の評価については、戦前・戦後を通じて数多くの見解が示されているが、大別すると、一つは専制権力の意志を示し、権力象徴の文化であるとするものであり、他はその面を持つも、近世文化、殊に元禄文化の先駆乃至準備期としての性格をも持つとするものである。「桃山文化の特質」は後者の立場にあつて論を進める。即ち、先ずこの文化の特質として、強力な封建支配、都市と商品経済の開花、国際的世界との接触という三つをみ、夫々を具体的な作品との関連で追求する。そして右の特質の底を流れるものとして、現実的・世俗的・人間的傾向、文化圏が京畿から地方にひろがつたこと、文化の享受層が中下層の民衆にまで及んだことをあげている。そして最後に評価の問題に触れ、この文化はルネサンスとはいえないが、近世文化を準備したといえようとする。

二・三感したことを述べると、先ずよく言われることであるが、古典文化、つまり王朝文化との関係が当然考えられなければならない。なんとについても宮廷貴族によつてつくられたものが、我が国文化の本流として敷衍している限り、それを無視しては桃山文化もな

りたえなかつたろう。次にこれと関連して文化人集団にも触れて欲しかつた。このなかには宮廷貴族・豪商・浪人が多く含まれる。そしてこれら実際の文化を荷担したものから考えてみるのも一つの方法ではないかと思う。更に大衆の文化の享受層であるが、氏の言われる中下層の民衆というのはある限定を加える必要がある。即ちそれらに与つたものは、ある程度の知識を持ち、また富を持つ層でなかつたらうか。最後に氏の整理した特質、あるいは底を流れるものとして挙げられた諸点からみると、全体の印象として、今少しルネサンス的なものを強くみても良いのではないかと思う。

次の「元禄文化の背景」は、元禄時代を中心に燦然たる華を開いた町人文芸の背後の事情として、商業と都市の発展を検討したものである。そしてこのため、氏は二段の構えをとつて論じられる。一つは大阪を中心とする日本海岸・瀬戸内海・九州あるいは江戸などの間に結ばれる商品流通網と商業発展の分析であり、他は直接文化を生み出した契機として、人々の物質ならびに文化・精神生活についての配慮である。殊に後者についての描写は巧みな筆緻と相まつて、感覚的に元禄文化が大凡どういふものかとの見当をつけさせて呉れる。

ただ異論がない訳ではない、それは商業とか都市の発展を少し直線的にとらえていないかという点である。というのは、この時期の商業と都市の発展が非常な繁栄をみせていることは事実だが、反面転換期に達していることも無視できない。つまり農民の商品経済の発展による都市の停滞化がこれである。そして同時に、権力による商業発展の阻止と統制がみえてきたのもこの時期である。勿論氏も

都市における貧富の対立、賤民に対する差別の強化などには触れていられる。しかしこの面を更に追求すべきでなかつたか。たとえば西鶴の作品には、一方に智慧と才覚によつて人生を切拓く新しい人間がえがかれる反面、貧苦にうちひしがれる人間がえがかれる。また近松の作品には重苦しくのしかかる封建制の圧力がえがかれる。つまり商業の発展は、その内部に矛盾対立をはらみ、外部では封建制に対決する。そこに焦点をおくべきではないかと思うのである。

4

第六の論文「封建時代賤民史の諸問題」は、被差別部落の歴史を中世末から近世を通じて辿つたものである。先ず部落の主流が近世の穢多に系譜をひくところから、中世における穢多の実体を明らかにする。その語句は弘安年間に初見をみ、ついで南北朝時代から室町・戦国時代に互つてしばしばみえてくる。しかし他の賤民たる散所者・唱聞師などにくらべると数は少い。これが近世になると、賤民の仕事が皮革・警吏などに局限されると共に、元々それに従事していた穢多がクローズアツプされ、穢多なる呼称が一般に用いられるようになる。次に近世のものを主として東北にみると共に、そこでの賤民の少いことに注目する。ところで元禄・享保頃から差別が強化され、殊に無宿者・農民の非人化、職人仲間の差別や、なかには百姓一揆の首謀者の家族を穢多にすることに触れ、これは反封建闘争をそらすための政策とする。そして最後に賤民と雑芸能との關係を論じて稿を終えている。

豊富な史料を駆使されての論述、就中元禄・享保期における穢

多・非人への政策には一入興味を持つて読んだ。賤民史が賤民の歴史のみにとどまらず、一般歴史との関係、氏の言われる理論的究明の深化こそが将来に課された仕事であると考ええる。

次の「封建都市の自治組織」は、中世・近世を通じて都市の自治がいかなるものであつたかを論じたものである。先ず中世からはじめ、そこでの自治組織たる惣町は、応仁大乱前後につくられ、領支配から独立をかちとうとしたとする。しかし十六世紀半になると、商業の発展が封建制と矛盾する形態をとつてきたので、権力者は統制を強化し、自治的側面を抑えた。その結果かつての自治的側面はかえつて都市と町民を支配する道具となつてしまつた。だが元禄・享保期を迎えると、在郷商業を背景として旧特権町人は衰退し、封建的自治組織は変容を余儀なくされる。その場合城下町にあつては御用的な自治機関は濃く残つたが、港町では民主的な傾向をとり、更に一般に封建的自治組織は形骸化する。

私は元禄・享保期から封建的自治組織が衰退して行く過程を、城下町・港町に分けて説かれたことに興味を持つたが、しかし同時に疑問を感じたのは、近世初期にあつては、何故陰鬱な共同体として、すべてを一括されたのかという点である。これは中世の惣町にも当然関連する、一般には氏の言われる通り、地侍によるヘゲモニーの強いものであつたか知れないが、類型・地域などによる差異がある以上、この差異をそのまま認め、殊更に一般性のみを強調する必要はないと思う。そしてこれと関連して、惣町が多く惣村結合を母胎としてつくられたとしてよいかという問題も残る。というのは、惣町が殆んど寺社門前とか港湾につくられていることで、これからみ

ると神人などから転化した商人や、あるいは純然たる商人が惣町づくりに大きく力をかしているのではないかと思われるからである。次にこれは今後の課題であるが、近世中期以降の新しい自治組織と近代のそれとの関連である。封建的な形態が形骸化したのは事実だが、そのなかからみえる民主的な形態は、当然近代社会にうつがれていったと思うが、どんなものであろうか。

5

最後に封建都市の崩壊期を扱った三論文がある。先ず「天明期前後の都市市況」は、天明期における都市経済の停滞の経過とその理由について述べている。即ち、この時期の都市は、殊に東北諸藩においてその貧しさが著るしく目に付く。また九州は東北程でないが、上方・山陽道にくらべると繁栄度は低い。かかる都市の沈滞を生んだものは、凶荒もあるが武士団の窮乏・藩財政の破綻によるものが多い。だが同時に在方商業の発展による都市の間屋・株仲間の動揺と衰退を見逃してはならない。ただこの時期、港町は全国的に活況を呈し、また城下町であつても全国的市場と結びついた所にあつては同様に榮えている。

私はこのなかで、在方商業の進展によつても、港町などは必らずしも衰退しなかつた、とする点に可成り興味を持つた。ただそれがそこだけに限定されたものか、あるいは三都を含む畿内先進地域においてもそうであつたのか、更には在方商業と結びつき、一層の繁栄をみせた都市が、幕末・維新のさいどのような役割を果たすのかについて、氏の御意見を聞きたいと思う。

次の「近世後期の都市下層民」は、借屋と貧民との分析である。先ず借屋にみると、その数は初期にあつては家持六に對し四の割合であつたが、時代の降るにつれ、それも商業発達の進んだところ程その率は高くなつてくる。いうまでもなくそれは、都市における市況の停滞と村落からの流入のためである。ところで借屋への圧迫は元祿以降強化され、殊に貧窮農民の都市流入が多くなるにしたがつて一段と高められる。一方かれらを含む貧民の数は、後期になると凶作や幣制紊乱のため激増し、更には貧窮の度を増していった。殊に三都などでは過半数が救恤の対象となり、またかれらを吸収すべき都市の資本制生産は未熟であつたと。

崩れざる借屋・貧民層の分析は見事である。唯余なことかも分らないが、このように都市は崩れるだけで、そこに新しい胎動はなかつたのだらうかとの疑問が出てくる。たとえば家持―借屋の封建的關係であるが、借屋に課税されることは、言い換えるならば、借屋の社会的地位の向上とならないだらうか。つまり家持―借屋關係は、時代の推移と共に漸次変質するのではないだらうか。これは前記の都市自治組織の場合とも関連すると考える。

最後は「近世の町方騒擾」である。これは『日本封建都市研究』のなかに示された二百件の事例に、更に七十件を追加したものである。即ち、騒擾は幕政初期にもみられるが、なんといつても享保以後に統発しており、殊に凶荒期である天明期には六十件を数えている。多くは巨商に対する打毀しであるが、幕末になると町政刷新を意図した騒動があり、在郷町を含め町人と農民の呼応によるものがあり、世直し一揆の形態をとつて来る。また天保になると局地的・

孤立的でなく、全国的に、それも有機的な関連性を持つものとなつてくる。戦術も巧みで組織的になつていることもこの時期の特色である。

これは都市民による反封建闘争をえがいたものであるが、かかる町人たちの積極的な蜂起と、先の論文にみるおちぶれ行く下層民との関連がどうなるのか、将来に残された問題であると思う。

以上十篇にのぼる論文の紹介と、二・三の疑点や意見を述べたのであるが、理解の未熟さのため誤まつているものがあるかとも思う。殊に近世については、私自身直接に研究しておらず、そのため全く的外れているかも知れないし、その点お許しを願いたい。(A5 四〇六頁 昭和三五年十一月 三一書房刊 定価八〇〇円)

大阪歴史学会編

封建社会の村と町

中 村 哲

大阪歴史学会の創立一〇周年を記念して二冊の論文集が刊行された。同学会古代史部会担当の『律令国家の基礎構造』と近世史部会担当の『封建社会の村と町』と題する本書がそれである。在野の学会として困難な条件を克服しながら研究をすすめて、多くの業績をあげてきた大阪歴史学会が一〇周年をむかえ、ここに記念論文集を発表されたことをよろこび敬意を表したい。

さて本書は「畿内先進地域の史的研究」という副題が付されているように、近世、とくに近世後期の大阪周辺地域の社会経済史の個別研究が中心となり、それに戦後の当該地域の研究史の整理と展望を加え、一〇編の研究論文よりなり、巻末に「摂河泉州農民闘争年表」と「摂河泉史文獻」がつけられている。「まえがき」の冒頭に「封建社会から近代社会への移行(封建解体)過程は、それが典型的に経過したとされる西ヨーロッパのばあいにも、複雑・多岐の動向にみだされている。そのうえに特殊の停滞性・後進性をかかえこんだ東洋諸国、また日本のばあい、それはあるいは埋没され、あるいは曲折した形であられる。そのようなものを幕藩体制社会のうち追及することは、いうまでもなく、日本近世史研究のひとつの課題であつて、近世後期の問題は明らかにここにしぼられてく